岐阜経済大学論集 33 巻 2 号（1999 年）

ルイ・ブランと「資本主義」

――「資本主義」語のはじまり (1)――

重　田　澄　男

I.「資本主義」という用語を使いはじめたのは誰か？
II. ルイ・ブラン
1. ルイ・ブラン――人物と社会的活動
2.『労働組織』の基本的内容
3.『労働組織』第 9 版における大幅な改訂増補
4. 第 9 版における「資本主義」語
5. ルイ・ブランにとっての「資本主義」
6. ルイ・ブランとマルクスとのかかわり

I.「資本主義」という用語を使いはじめたのは誰か？

「資本主義」という用語は，いつから，誰が，使いはじめたものなのだろうか。

このことは，現在までのところ必ずしも明らかではない。ヨーロッパ諸国における用語探索や文献吟味においても，その点についての共通の理解はみられないようである。

まず，「資本主義」という用語の使いはじめについて指摘している 3 つの資料の点検から始めよう。

第 1 に，「資本主義」という用語の起源と普及の考証についてのドイツで

の古典的研究として有名な，古いものではあるが現在なおもっとも詳細な文献であるといえるパッソウの『資本主義――概念的・術語的研究――』[1]からみてみよう。

パッソウは，「資本主義」という表現用語の最初の使用例として，Lous Blanc, *Organisation du travail*, 9e éd., Paris, 1850（ルイ・ブラン『労働組織』第9版，1850年）[2]を挙げている。

第2は，イギリスのマルクス経済学者の重鎮であったE. J. ホブズボーム（E. J. Hobsbaum）がとりあげているものである。ホブズボームは，『資本の時代　1848―1875年』のなかで，「1860年代に1つのあたらしい言葉が，世界の経済・政治用語に登場してきた。『資本主義』という言葉である」[3]と述べながら，それにたいする注のなかで，「『資本主義』という言葉の起源は『革命の時代』において示唆しておいたように1848年以前にさかのぼるであろう。しかし詳細な研究によれば，1849年以前にはこの言葉はほとんどみられず，また1860年代以前にはあまり広範に用いられてもいなかった」[4]としている。

ホブズボームがそこで指摘している「詳細な研究」とは，ジャン・デュボア『フランスにおける政治的・社会的用語集　1869―1872年』[5]である。

この『フランスにおける政治的・社会的用語集』において，デュボアは，「資本主義 capitalisme」という用語の使い方について，次のように指摘している。

「《資本主義》という言葉は，M. Block〔M. Block, *Les Théoriciens du socialisme en Allemagne*, 1872〕によると，1872年に普及したばかりであった。しかし，《資本主義》という言葉の使い方は，初めから《資本家》という言葉の使い方から強い影響を受けていた。《資本家》という言葉は，もっと古く18世紀に出現し，社会主義者たちの著書をつうじて，フランス革命以来その歴史を追うことができるものである。」[6]

そして，この『用語集』においては，「資本主義」という用語を用いているもっとも古いフランスの文献として，P. Leroux, *Malthus et les èconomistes, ou, y aura-t-il tooujours des pauvres ?* 1848（ピエール・ルルー『マルサスと経済学者たち』1848年）を挙げ，そこに「私は，鎖につながれ資本主義（capitalisme）の鞭のもとで労働する諸国民を見る」[7]という叙述がある，としている。

そして，それ以外には，A. ブランキ『社会批判』（1869年）や1870年代はじめの諸文献が指摘されている。

ところで，第3として，「資本主義」といった用語をふくむ用語集の新しいものとして，T. B. ボトモアの編集した Tom Bottomore ed., *A Dictionary of Marxist Thought*（『マルクス主義思想辞典』第2版，1997年）がある。

この『マルクス主義思想辞典』は，イギリスのマルクス主義的社会学者のT. B. ボトモアを編集代表とし，L. ハリス，V. G. キールナン，R. ミリバンドを編集陣にくわえて1983年に刊行され，さらに1991年に新項目をつけ加えた第2版が刊行されているものである。

この辞典は基本的には中項目主義をとっており，「資本主義」項目についても，2段組で3ページ半にわたるかなり詳しい説明をおこなっている。

この『マルクス主義思想辞典』における「資本主義」項目の執筆者は，メグナド・デサイ（Meghnad Desai）である。

デサイは，LSE すなわちロンドン・スクール・オブ・エコノミックス（ロンドン大学）においてマルクス経済学を担当しているスタッフで，その著書の1つは翻訳されている（メグナド・デサイ『マルクス経済学』馬渡尚憲・石橋貞男・奥山忠信訳，御茶の水書房，1981年）。

デサイは，この『マルクス主義思想辞典』のなかで，「資本主義」という用語の使用について，次のように述べている。

「“資本主義”という言葉は，トーニーやドッブが指摘しているように，非マルクス学派の経済学ではほとんど使われていない。しかし，マルクス

主義者の諸著作においてさえも，それは遅くなってから使われたものである。マルクスは，形容詞の『資本家的』を使用し『資本家たち』について語るけれども，名詞としての資本主義は『共産党宣言』においても『資本論』第1巻においても使っていない。ただ，彼は，1877年に，ロシアの仲間との手紙において，ロシアの資本主義への移行の問題についての議論の中でそれを使っているのである。……*OED*は，その最初の使用（Thackeray〔サッカレー〕による）は1854年より遅くはないとして事例を挙げている。」[8)]

OED（*Oxford English Dictionary*）は，capitalism 項目において，その初出は「1854 THACKERAY Newcomes II. 75」[9)]としている。すなわち，サッカレーの *The Newcomes: memoirs of a most respectable family*（『ニューカム家の人びと――あるもっとも尊敬すべき家族の思い出』）の第2巻（1854）[10)]において，「資本主義」という言葉が使われている，としている。

そのように，『マルクス主義思想辞典』におけるデサイは，*OED*によりながら，「資本主義」という言葉は1854年にサッカレーによって最初に使われたとみなしているのである。

これまで見てきた諸見解によるならば，「資本主義」という用語を使いはじめた人物と文献は次のごとくである。

1918年時点において，ドイツのパッソウは，『資本主義――術語的・概念的研究』において，「資本主義」という用語を最初に使った文献と人物はルイ・ブランの『労働組織』（第9版，1850年）であるとしている。だが，イギリスのホブズボームは，1975年に，フランスのデュボア『フランスにおける政治的・社会的用語集』に拠っており，そこではルルー『マルサスと経済学者たち』（1848年）であるとしている。ところが，1991年時点においてもなお，イギリスで編集された『マルクス主義思想辞典』において，デサイは，*OED*に拠りながら，サッカレーの『ニューカム家の人びと』第2巻（1854年）

を挙げているのである。

どうやら，「資本主義」という言葉を誰が最初に使いはじめたかということについての定説は，国際的にまだ確定していないとみていいようである。

ヨーロッパ諸国における膨大な文献（著書，論文，新聞・雑誌記事，パンフレット等々）において，誰が「資本主義」という言葉を初めて使ったかについて確定することはきわめて困難であるにしても，書物として公刊された叙述に限ってみても，「資本主義」という用語が初めて使用された文献と著者についての見解はいまだ確定していない，といえるようである。

II. ルイ・ブラン

1. ルイ・ブラン——人物と社会的活動

ルイ・ブラン（Jean Joseph Charles Loise Blanc, 1811–82）は，1811年にマドリード（スペイン）に生まれた。パリに出て法律を学び，1830年7月革命ののちバブーフ主義者の仲間に加わる。その後《*Bon Sens*》誌の編集，1839年には《*Revue du Progrès*》誌を創刊してその編集にあたっている。また，ピエール・ルルーやジョルジュ・サンドとともに《*Revue Independants*》の編集をおこない，さらに，急進共和派の新聞《*la Réforme*》紙の編集に加わっている。

さらに，彼は，1840年に『労働組織』（*Organisation du travail*）を出版して大反響をひきおこし，一躍有名になった。また，1841年から44年にかけて『10年史』（*Historie de dix ans, 1830–1840*）5巻を書いて，7月王政の批判をおこなっている。

しかも，ブランは，1848年の2月革命による7月王政の崩壊ののち，ブルジョワ共和派と社会主義派とからなる臨時政府の閣僚の一員となり，「労

働者のための政府委員会」（リュクサンブール委員会）の議長に選ばれ，国立作業場の設立などに取り組んだりした。だが，4月選挙で社会主義派は大敗して共和派政府が成立し，さらに，国立作業所の解散に憤激したパリ労働者の6月蜂起も鎮圧されるにいたった。

しかも，ブランは，1848年5月15日の労働者の議会乱入事件をそそのかした嫌疑を受けて，1849年3〜4月のブルジェでの裁判によって国外追放に処せられることになり，ロンドンに亡命する。

イギリス亡命中も，ブランは，『フランス革命史』（*Historie de la révolution française*）7巻（1847–62）を完成するなど，執筆活動を盛んにおこなっている。1870年，普仏戦争の敗北とナポレオン3世の退位による第2帝政の崩壊後フランスに帰国した。帰国後，ブランは，1871年に第3共和制の国民議会議員に選ばれ，議会や言論界で活躍したが，パリ・コミューンにたいしてはヴェルサイユ側に参加している。1876年には日刊新聞《*Homme libre*》を発行したが，これは数カ月しか続かなかった。さらに，ブランは1876年以後も1882年の死にいたるまで国民議会議員に選出されている。1882年，72歳にて死亡。

〔主要著書〕[11)]

Organisation du travail, 1840.
Historie de dix ans, 1830–1840, 5 vol., 1841–44.
Historie de la révolution française, 12 vol., 1847–1862.
Le socialisme; droit au travail. Reponse à M. Thiers, 1848.
A l'opinion publique, le citoyen Louis Blanc, 1848.
Commission de gouvernement pour les travailleurs; discours de Louis Blanc sur l'organisation du travail, 1848.
La révolution de février au Luxembourg, 1849.
Catéchisme des socialisme, 1850.
La formule du socialisme, 1850.
Pages d'histoire de la Révolution de février, 1850.
1848, Historical revelations inscribed to Lord Normandy, intitulé : A Year of Revolution in Paris, 1859.

L'Etat et la Révolution, 1865.
Lettres sur l'Angleterre, 4 vol., Ière série, Paris, 1865–1866; 2e série, 1867.
Napoléon; les deux clergés; le divorce; une page d'historie, 1870.
Histoire de la Révolution de 1848, 2 vol., 1870.
Ce qu'étaient autrefois les Confréries ouvrières, 1873.
Dix ans de l'histoire d'Angleterre, 1879–1881.
Histoire de la constitution de 1875, 1881.
Discours politiques, 1847 à 1881, 1882.
Questions d'aujour d'hui et de demain, 5 vol., 1882.

2.『労働組織』の基本的内容

19世紀前半のフランスにおける思想を特徴づけているのは，フランス革命の自由と平等の理念と，そして，産業革命のもたらした社会的困窮にたいする批判であった。

1830年7月におこった7月革命はルイ・フィリップによる7月王政を生みだしたが，7月王政の1830年代はフランスでは繊維産業を中心に産業革命が進行した時期であった。この時期には，労働者階級の失業と貧困は深刻であった。繊維産業では，労働者は，14～18時間にもわたる長時間労働と，きわめて安い賃金と，そして，くりかえされる失業化のため，食うや食わずの状態は通常の事態であった[12)]。

さらに，農村から都市に流入して就業の機会を求める貧民によって失業と貧困は一層深刻なものになり，労働貧民とその家族は非衛生的で不健康きわまる居住条件のもとで生活せざるをえなかった。7月王政期の1830～40年代は，まさに失業，貧困，悪疫などの社会問題の時代であった。

そのため，7月王政のもとでは，カベ派，フーリエ派，アトリエ派，サン＝シモン派などが，さまざまな社会改革のプランを提出した。これらの改革案は，社会全体の変革をめざすものとして〈社会主義〉と呼ばれるものであった。

当時のフランスの社会問題の解決のための組織として広範に主張されたのが協同組織（アソシアシオン）であった。とくに2月革命後の1850年代において労働者を支配したアソシアシオン熱はすさまじいもので，この時期にパリでは300，地方で800の労働者生産協同組織（アソシアシオン）が形成され，その多くは「友愛と連帯の協同組織」を名乗っていた，とのことである。

このような時代状況のなかで出版されたルイ・ブランの『労働組織』は，ブランが1839年に“*Revue du progrès*”（『進歩評論』）誌に連載した論文を，翌年の1840年にパンフレット的な著作として公刊したものである[13)]。

本書は出版直後から大反響をまきおこし，初版は数日にして1,000部を売り尽くし，くりかえし版を重ねることになった。

このブラン『労働組織』は，版を重ねながら訂正増補がおこなわれている。1840年に出た初版[14)]は131ページしかなかったのに，1841年に出した版[15)]では彼への批判にたいする反論をも収録して判型も大きくしてページあたりの字数を多くしながら224ページとページ数も増やしている。さらに，1845年の第4版[16)]は240ページ，1847年に出た第5版[17)]は284ページと量的にかなり増えている。さらに，1848年には英訳が出され，1850年には第9版[18)]を出すにいたる。

もともと『労働組織』においてルイ・ブランが打ちだした見解は，自由競争の批判と生産協同組合（アソシアシオン）創設の提唱である。すなわち，競争から生じる社会対立をなくして協力的な労働にもとづく社会をうちたてるために，《社会作業場》を設立して労働の組織化をおこない，新しい社会の実現をめざすというものであった。

すなわち，無制限の自由競争のもとでは，労働者の相互の競争が彼らの賃金をたえず下落せしめ，労働者とその家族は貧困のどん底に投げこまれ，お互いに滅ぼしあうことになる。そこに家族の崩壊，工場での児童労働の採用がひろがる。

しかも，競争は，労働者だけでなくブルジョアの大多数をも安値競争に

よって破滅に導くようになる。そして，競争は独占に導き，その結果，競争による価格下落によって当初は利益をえていた消費者大衆も結局は独占による価格上昇のために貧困におちいって，消費の減少がひきおこされることになる。

さらに，国際関係においても，自由競争がもたらすものは，イギリスの例をみると，外国に求めるのは原料供給と「支払う消費者」としての属国化であって，ついには他国民の富の源泉を涸らしてしまうことになる。さらにまた，イギリスとフランスとのあいだの国家間の紛争をひきおこすといったかたちで，競争は世界の大動乱を必然的にする。

このように，競争は，プロレタリアとブルジョアを，生産者と消費者を，さらには国家や国際関係をも破滅的事態におとしいれることになる，とブランはとらえるのである。

そして，このような災悪を避けるためには，民主的な共和制国家による労働の組織化，すなわち《社会作業場》を設立して生産の制御をおこなうというアソシアシオン（生産協同組織）をうちたてることが必要である，と結論づけているのである。

3.『労働組織』第9版における大幅な改訂増補

そのような見解を基本的内容とした『労働組織』であったが，ルイ・ブランは，第9版にいたって，根本的ともいえるほどの大幅な編別構成の増補・改訂による内容の拡充をおこなっている。

すなわち，1850年に刊行した『労働組織』第9版においては，従来までの基本的内容を「第1編 工場労働」にとりまとめている。そして，それに加えて，「第2編 農業労働」において，フランスにおける農業の衰退は土地の限りなき細分化をもたらす小農制度によるものであって，大農場制こそが唯一の農村救済策であるとみなして，アソシアシオンと共同所有にもとづく

《社会農場》の意義と必要性を主張する。さらに，「第3編 文筆労働」では，社会的に有意義な著述家の仕事を金儲けの営利的な職業とすることへの批判と，思想の私的所有権としての著作権制度に対抗するために，文筆労働のための社会的組織（アソシアシオン）としての《社会書店》の構想を提示する。そして，そのうえで，「第4編 信用」の編において，金融上の支配者たちが手に入れている資本の「利子」は原理的に正当なものではないにもかかわらず，個人主義と競争の制度のもとではそれを廃止することは不可能であるため，国立銀行の変革を過渡的措置として，民主的信用組織としての組合（アソシアシオン）による利子のない信用の実現を主張するのである。

ところで，この1850年の第9版における大幅な増補改訂は，1848年の2月革命後の臨時政府へのブランの参加とそこでのリュクサンブール委員会の委員長としての〈国立作業場〉の設立やその短期的挫折などの経験を経て，より新たな論点をつけ加え拡大された編別構成による内容の拡充をおこなったものである。そして，全体的にいえば，大革命を進行させるという特殊な任務をもった「〈進歩省〉を創立して，……大革命の事業に信用，工業，商業を結合」[19]すべきであって，そのためにまず《社会作業場》による労働の組織化をおこなう必要がある，としているのである。

そのような2月革命後の経験を経た論述であることは，第9版のなかで，「もし1848年の革命が，この道に従うことを決心した人々のみを政権につけていて……行動を委任された進歩省が設立されていたならば，今日において，社会主義による再生の事業はすべての討論を超越しているだろう」とか，「リュクサンブール制度は実験されていないのであるからして，共和国の議事日程としてまだ残されているのである」[20]といった指摘や，「諸君は……2月革命の社会主義的諸理論が実施されることを望むか」といった問いかけをおこないながら論議を展開しているところからも，明らかである。

4. 第9版における「資本主義」語

後年，「資本主義」（capitalisme）という言葉は，ルイ・ブランの『労働組織』において初めて使われたものであるという指摘をパッソウをはじめとしていく人かの論者がおこなっているのであるが，しかし，1840年の『労働組織』の初版においては，「資本主義」という言葉を見いだすことはできない。

さらに，1841年の新しい版にも，1845年の第4版にも，1847年の第5版においても「資本主義」という用語は使われていない。

「資本主義」という用語は，1850年に出版した『労働組織』第9版において初めて使われたもののようである。パッソウが，「資本主義」という用語を初めて使った文献として，ブランの『労働組織』の第9版（1850年）をわざわざ挙げているのも[21]，そのためであろう。

では，なぜ，いかにして，ブランは，『労働組織』の第9版にいたって，「資本主義」という言葉を新たに使うことになったのか。

ブランが『労働組織』のなかで「資本主義」という言葉を使っているのは，第9版で追加的に編を立てたなかの最終編である「第4編 信用」においてである。

この「第4編 信用」において，ブランは，資本の利子と信用組織を問題にしているのであるが，その第1章「資本の利子は原則的に正しくない」において，まず，「資本」について次のように述べている。

「資本とは何か？ 経済学者たちによって与えられた諸定義は同一ではない。しかしながら，そうした諸定義はすべてほとんどジョン・スチュアート・ミルのつぎのような定義に帰着するのである。資本とは再生産的使用にあてられた富である。この定義を支配しているのは，みられるように労働の観念である。働いているあいだ人間は衣食住を必要とする。労働の材

料が必要である。機械や道具が必要である。かくして，資本は労働の手段または器具の全体であると定義されうるのである。」[22)]

このように，ブランは，「資本」を「再生産的使用にあてられた富」であり「労働の手段または器具の全体である」というかたちで生産手段（労働手段と労働対象）そのものとしてとらえ，そのうえで，「利子」について，「利子とは何か？ これは資本すなわち労働用具の使用にたいして，それを所有しない人々が支払わなければならないところの価格である」[23)]とするのである。

すなわち，すべての人の生活のための手段である労働にとって必要な労働用具を，一部の人たちが排他的に独り占めすることによって，利子が生じることになるのであって，「利子なるものは，一方の人々にとっては，万人のものに属さねばならない労働用具の独占の利得であり，他方の人々にとっては，生活権を実現する能力を買うために必要な価格なのである」[24)]とみなすのである。

そのように，ブランは，生産手段としての「資本」という万人にとって必要な有益な事物を一部の人たちが排他的に専有するということによって，「資本主義」（capitalisme）と呼ぶべき事態が生みだされることになる，とするのである。

そして，有用物の貸し手が，支払日に，貸した価値の他に受けとるサービスを「利子」とみなして，「利子」の正当性と有用性を主張するバスティア（C.F. Bastiat, 1801–1850）にたいして，「資本主義」という言葉を使用しながら批判をくわえていく。

「われわれは，バスティア氏の全体の議論の基礎をなしている詭弁がいかなるものから成りたっているかを知っている。この詭弁は，資本の有益性と，わたしが資本主義（capitalisme）と呼ぶもの，すなわち人による資本の

排他的専有とを，たえず混同するところにある。ちょうど一つのものの有益性が，その性質から生じるのではなくてその独占から生じるかのように！……

まさに資本が有益であるため，そしてまた資本が必要であるため，資本の使用を大きく制限し資本の流通を遅くするところの利子なるものは，正しくないものである。それゆえ叫べ，資本万歳！と。われわれは資本を賞賛し，そして，同時に，資本の不倶戴天の敵たる資本主義（capitalisme）をそれだけ烈しく攻撃しよう。金の卵をうむめん鶏万歳！ そして，その腹をさく奴にたいして，資本を守ろう」[25)]

このように，フランス初期社会主義の論者としてルイ・ブランは，1850年に，『労働組織』第9版におけるブルジョア体制擁護の経済学者バスティアにたいする批判のなかで，フランス語形で「資本主義 capitalisme」という新しい言葉を使用したのである。

5. ルイ・ブランにとっての「資本主義」

これまでみてきたところからも明らかなように，ルイ・ブランは，労働用具そのものを「資本」とみなし，そのような「資本」の排他的専有にもとづいて資本の私的所有者が「利子」を手に入れる事態を，「資本主義」という新しい言葉でもって表現したのである。

そのように，ブランは，『労働組織』第9版において，それ以前にすでに存在していて日常的に通用していた「資本 capital」という言葉に関連させながら，「資本主義 capitalisme」という新しい言葉を作り，特有の意味をもつものとして使っているのである。

そのようなブランの「資本主義」という言葉においては，近代社会批判におけるきわめて鋭い直感的洞察と，理論的混乱とが併存している。

まず，「資本主義」という言葉によって，生産手段が社会構成員のなかの一部の人によって排他的に専有されているという近代社会に特有の社会関係のうえに生みだされる事態をとらえている。

その結果，「資本主義」という新しい用語は，近代社会の経済的諸関係における生産手段についての所有＝非所有という私的所有の社会的分断構造によって基礎づけられるところの，富と貧困との対立と矛盾が生みだされる基礎たる階級的な排他的所有としての資本主義的私的所有のもたらす事態をしめすものとして作られ，使われているのである。

そして，それとともに，そのような「資本主義」というあたらしい言葉でしめされた近代社会の矛盾し対立する事態を克服するものとして，生産手段の共同所有と協同労働にもとづく「社会主義」による矛盾の解決の方向を提示する，という志向性をもつものとなっているのである。

ところで，ブランの「資本主義」という用語は，そのような近代社会の経済システムにたいする根底的批判にとっての基礎をしめすという積極的意義をもつものであると同時に，他方では，資本家と賃金労働者とのとり結ぶ資本＝賃労働関係を，利子を生みだす債権・債務の信用関係として把握するという，理論的混乱を基本的内容とするものである。

ブランはいう。

「信用とは何か？ 個人主義制度の観点からすると，それは資本家に，一定の同意された条件でもって，一定期間のあいだ，労働者が資本家の産業を利用するために必要な労働用具の使用を労働者にゆずらせる信任なのである。／この譲渡がおこなわれるのは，資本家がそれに同意することによって利益をみいだすことのできる場合であり，そしてなお，彼が一時的にその権利をゆずるその価値がけっして失われないということが確かであるときである。そうでなければ，それはおこなわれない。」[26)]

ブランは，利潤を生みだす資本＝賃労働関係という生産過程における「賃金労働者」と，利子を生みだす債権・債務関係における「債務者」とを，重ね合わせて同一視しており，しかも，それを「利子」に収斂するかたちで把握しようとしているのである。

「利子なるものは，一方の人々にとってはみんなの所有に属さねばならない労働用具の独占の利得であり，他方の人々にとっては生活権を実現する能力を買うに必要な価格なのである！ 生きるためには，わたしは働かなければならないであろう。……そして，わたしは彼らの賃金労働者になるのである。

もし，わたし自身がより幸福であって，すでに何ものか例えば畑を持っているとしても，わたしはそれを耕作するためにわたしに欠けている労働用具を必要とする。そこで，わたしは，その用具の持ち主に頼んで，一定期間，わたしにその利用の譲渡を彼から得るのである。そして，わたしは，利子という名義でその使用にたいして彼に支払いをするであろう。かくしてわたしは彼の債務者になるのである。

このように，賃金労働者の状態と債務者の状態とは，どちらも，労働手段がみんなによって処置される代わりに，2，3の人によって排他的に所有されているという事実に，その起源をもっているのである。」[27)]

このようにして，ブランの「資本主義」という用語は，利子－信用関係と直結したものとされているのである。

そのことは，「資本主義」という言葉が，『労働組織』第9版のなかの「第1編 工場労働」においてではなく，「第4編 信用」のなかで使われているというところに，端的にしめされている。

そのように，ブランは，「資本主義」なる用語でもって，直接的には，信用制度のもとで利子を生みだす特有の社会関係のあり様をとらえているので

ある。彼は，「資本」を人間の生存にとって超歴史的に必要な生産活動にとっての要因としての生産要素そのものと同一視しながら，「資本主義」を特徴づける近代社会に特有のあり様を，生産過程における資本＝賃労働関係においてではなくて，信用制度のもとでの債権・債務関係による「利子」に引きよせるかたちでとらえているのである。

ところで，ブランがそのような把握をおこなったのには，それなりの客観的根拠と理論的背景とがある。

まず，その客観的根拠となっているのは，当時のフランスにおける前近代的関係の残存と，近代的な資本主義的生産関係の発展の未成熟という現実的基盤そのものである。

たとえば，1831年にリヨンで蜂起した絹織物工についてみると，当時のリヨンの絹織物工業の中核をなして労働者を雇用していたのは，その多くが数台の織機をそなえる小作業場（アトリエ）であった。これら小作業場の経営者が，織機の所有者であり，職工の雇い主であった。だが，同時に，彼ら小作業場経営者は，彼ら小作業場主にたいして資本や原料を前貸しして加工賃を支払っていた「商人＝製造業者」（マルシャン・ファブリカン）に支配されていたのである。小作業場主は半経営者にすぎなかったのである。小作業場主と「商人＝製造業者」のあいだには，加工賃や製品の品質・納期をめぐる紛争がたえなかったが，つねに優位を占め富を蓄積していったのは，工賃などの最終決定権をもつ「商人＝製造業者」であった。小作業場経営者と労働者のあいだにも対立はあったけれども，支配的な対立関係は「商人＝製造業者」と小作業場主を含む絹織物工業生産者とのあいだに存在していた，といわれている[28)]。

ブラン自身が『労働組織』で挙げている事例をみても，賃金労働者が雇われている企業は，平均して2，3人からせいぜい10人程度の労働者が親方に雇われている業種がほとんどである。

そして，そのような小企業主の場合，企業主は，「商人＝製造業者」とし

ての金持ちに利益を生ませることを委託されるか，あるいは，仕事の先頭に立って賃労働者を直接に支配し彼らに賃金を支払うといった，金持ちと働く貧民のあいだの中間者であった，といわれている。

他方，労働者自身についてみると，長い養成期間を必要とする職種にたずさわる職人的労働者と，製造工場や機械にしばりつけられている工場労働者とから構成されていた。

そして，ブランが賃金（日給）や労働条件をしめしている製本女工，帽子製造女工，仕立て女工等の女子労働者38種類，藁ふとん仕上げ工，銀細工人，金箔師などの男子労働者76種類は，その多くは職人的労働者である。

すなわち，ブランが『労働組織』の「第1編 工場労働」において挙げている当時のフランスの労働者としては，親方によって使役されている職種の労働者が念頭におかれていたようである。そして，それと同時に，雇用主としての小経営者においては，近代的な資本主義的企業経営者としての規定性がまだ曖昧で希薄である。

そのため，ブランは，「資本」を生産要素そのものとしながら，生産要素の使用をつうじて利潤獲得をおこなう「資本家」との不可分の結びつきを明確にしないままに，作業場主については，「商人＝製造業者」に資金や資材を貸与されながら小作業場に少数の労働者を雇い生産活動をおこなう「親方」というかたちの把握となっているのである。

ところで，ブランのそのような把握にあたっては，当時のフランスにおける資本主義的生産形態そのものの未成熟という現実的基盤があっただけでなく，さらに，理論的把握にあたっての，当時のフランス社会主義者たちのなかで理論的には卓越していたプルードンの影響もあったようである。

「利子」の不当性を資本主義的な近代社会批判の根底に定立したのはプルードンである。プルードンは，社会悪の根元を，所有権から生じるさまざまな形態による利子の収奪にあるとしていて，その根絶のために，生産―交換―消費の過程を等価交換によって媒介し，その自立性を貫徹させるた

めに，人民銀行を提唱しているのである。

産業革命によって急速に資本主義化しつつある事態のなかで，「利子」の不当性を資本主義批判の基軸とするという点については，ブランも，同時代の他のフランスの社会主義者たちと同様に，プルードンの理論的影響を強く受けているようである。

なお，「資本主義」という用語は，『労働組織』第9版のブランにおいても，わずか2回しか使われていない。「資本主義」という用語は，ブラン自身にとってもきわめて稀にしか使われないカテゴリーでしかないものである。

ブランの『労働組織』の主題は，近代社会における競争の排除と《社会作業場》の設置＝アソシアシオン的労働組織による協同社会の設立の必要ということであって，それは近代社会における資本主義的経済構造の歴史的形態の解明とはなっていない。そのため，せっかく「資本主義」という用語をあたらしく作りながら，それを軸にすえた近代社会の経済的システムについての理論的把握をおこなうにはいたっていない。

6. ルイ・ブランとマルクスとのかかわり

1811年生まれのルイ・ブランは，1818年生まれのマルクスや1820年生まれのエンゲルスと比べて，若干年長ながらもほぼ同世代の存在である。

マルクスは，『ライン新聞』の編集者の職を辞して，1843年10月下旬にパリに移り住むが，同年12月にブランの『10年史』を読んでおり，翌1844年3月23日には，ピエール・ルルーやバクーニンなどとともにルイ・ブランも出席していた世界の民主主義者の会合に出席している[29)]。さらに，マルクスは，1845年1月下旬に個人的にブランに会っている。

エンゲルスも，1847年10月25日付けのマルクス宛ての手紙のなかで，「やっと今日小男のルイ・ブランに――それも門番女と激しく争った末に――

会えた」と書いており，ブランの印象については，「彼は非常に丁寧で，まったく懇切だった。君にもわかると思うが，この男なら大丈夫だ，世界一の素質をもっている」[30]と，高い評価を与えている。そして，その手紙のなかで，以前のマルクスとルイ・ブランとの顔合わせについて，「君たちがいくらか冷淡に別れたことなどを残念がっていた」とも書いている。

そのように，マルクスも，エンゲルスも，さまざまなかたちでルイ・ブランとの接触をもっている。さらに，フランス社会主義者のなかでそれなりに有名であったルイ・ブランについては，たとえば1845年から46年にかけてマルクスとエンゲルスとの共著として書かれた『ドイツ・イデオロギー』においても，何度か言及している。

さらに，1848年の2月革命と臨時政府へのブランの入閣とリュクサンブール委員会の議長としての活動については，マルクスが1850年に執筆し『新ライン新聞』に発表した『フランスにおける階級闘争　1848年から1850年まで』のなかでのいわば政治的主役の一人として，ブランの名前は続出している。

ブランのロンドン亡命後においても，同じように1848年革命の挫折後の反動化のなかでロンドンに亡命したマルクスにとって，亡命者たちのさまざまな行動のなかでのかかわりがあって，マルクスの『亡命者偉人伝』（1852年5月―6月）や『フォークト君』（1860年）などに，ブランは顔を出している。

ところで，理論的な面についてみると，マルクスは，ルイ・ブランについてはとくにとりたてては問題にしていない。当時のフランスの社会主義者たちのなかで大きく問題にしたのはプルードンについてであって，プルードンにたいしては『哲学の貧困』（1847年）なる批判書を書いている。

ところで，ルイ・ブランの『労働組織』については，たとえば先にみた1847年10月25日付けのエンゲルスのマルクス宛ての手紙のなかで，「労働者たちは彼の『労働組織』を安い値段で3000部印刷したが，2週間後には

新版が3000部必要になった，とのことだった」[31]と，触れている。

このようなブラン『労働組織』への言及は，エンゲルスがイギリスのチャーチストの中央機関紙『ザ・ノーザン・スター』1847年11月20日付け（第526号）に掲載した「フランスの選挙法改正運動」のなかにおいても，「この地〔パリ〕の労働者は，革命，しかも最初の革命よりもはるかに徹底的で根本的な革命の必要を，かつてないほど深く感じとっているのだ。……しかも同時に，社会経済上の諸問題の研究に真剣に没頭しているのだ。これらの問題をといてこそ，どんな措置によってはじめて万人の福利を確固たる基礎の上に樹立することができるかが明らかになるのである。1，2カ月のあいだに，ルイ・ブラン氏の著書『労働組織』が600部もパリ工場内で売れた。しかもこの本は5つの版が以前に発行されていることを考えなければならない」[32]と述べているところでもある。

ところで，ロンドン亡命直後の1850年代のはじめの時期に，エンゲルスは，ルイ・ブランにたいする全面的な批判の必要を感じたようである。1851年2月26日付けのマルクス宛の手紙のなかで，「小男ブランのほうは，一度最近の機会に彼の全著作をやっつけるのもわるくはないだろう――君は『労働組織』や『革命史』を，僕は『10年史』を，また2月以後に実行に移された協同組合は2人で一緒に批評するとして，『歴史の諸ページ』を。復活祭には僕がロンドンに行くから，そのときにでもいくつかはやれるだろう。これらのしろもの自体はベルギーの複製本が当地で安く手にはいる」[33]と書いている。

これらの諸点からみて，マルクスとエンゲルスがルイ・ブランの『労働組織』を目にした可能性は大いにあったということができる。

しかし，ブランがあたらしい内容をもりこみ「資本主義」という言葉を初めて使った第9版にわざわざ目を通したかどうかは明らかではない。

さらにいえば，ブランの『労働組織』の内容を理論的に問題にした指摘は見られない。

しかも，ブランが「資本主義」という言葉を初めて使った1850年といえば，マルクスは，すでに，1843年から44年にかけての『経済学・哲学草稿』において資本家・賃労働者・土地所有者の三大階級の対比的分析をおこなっており，1845年から46年にかけてのエンゲルスとの共同執筆による『ドイツ・イデオロギー』における唯物史観の確立のうえに，1847年の『哲学の貧困』において「ブルジョア的生産」「ブルジョア的生産関係」といった資本主義カテゴリーを確定して，それにもとづきながらフランス社会主義者のなかの最高の理論家と目されていたプルードン批判をおこなっているのである。しかも，そのうえに，1848年の『共産党宣言』，1849年の『賃労働と資本』をすでに執筆しており，そして，『フランスにおける階級闘争　1848年から1850年まで』を書いて，1848年2月革命とその後の事態におけるルイ・ブランの政治的対応の批判をもおこなっているのである。

そのようなマルクスとエンゲルスの到達していた理論的水準の高さからみて，1850年時点において，たとえブランの『労働組織』の第9版を読んだとしても，それに理論的に影響を受けたり，あるいはそこにおける「資本主義」という用語の使用に大きな意義を感じたりすることがありえたとは思われない。

〔注〕

1) Richard Passow, *"Kapitalismus" Eine begrifflich-terminologische Studie*, Jena, 1918.

2) Lous Blanc, *Organisation du travail*, 9e éd., Paris, 1850.

3) E. J. Hobsbawm, *The age of capital, 1848–75*, London, 1975, p.1. ホブスボーム『資本の時代 1848—1875年』第1分冊，1981年，みすず書房，1ページ。

4) *Ibid.*, p.1. 邦訳2ページ。

5) J. Dubois, *Le Vocabulaire Politique et social en France de 1869 à 1872*, Librairie Larousse, Paris, 1962.

6) *Ibid.*, pp.48–49.

7) P. Leroux, *Malthus et les èconomistes, ou, y aura-t-il toujours des pauvres?* 1848, p.25. D. O. Evans, *Le socialisme romantique — Pierre Leroux et ses contemporains*, Paris, 1948, p.81. J. Dubois, *Le Vocabulaire Politique et social en France de 1869 à*

1872, p.238.

8) Tom Bottomore, ed., *A Dictionary of Marxist Thought*, 2nd ed., Oxford, 1997, pp.71–72.

9) *The Oxford English Dictionary*, 2nd ed., 1989, Vol.II, p.863.

10) W. M. Thackeray, *The Newcomes: memoirs of a most respectable family*, Vol.II, 1854, p.75.

11) ルイ・ブランの主要著書については，浅野研真「ルイ・ブランの生涯と学説」（ルイ・ブラン『労働の組織』『社会思想全集』第3巻，平凡社，1932年）に拠っている。

12) この時期のフランスの社会経済の状況と思想動向については，河野健二編『資料フランス初期社会主義 二月革命とその思想』（平凡社，1979年），および，阪上孝『フランス社会主義』（新評論，1981年）に拠るところが大である。

13) 浅野研真，前掲「ルイ・ブランの生涯と学説」253ページ。河野健二編，前掲書319ページ。平瀬巳之吉『古典経済学の解体と発展――ロォドベルトゥス批判――』日本評論社，1950年，201ページ。

14) Louis Blanc, *Organisation du travail*, Paris, 1840.（東北大学所蔵）。ブラン『労働組織』初版の結論部分については，ルイ・ブラン「労働を組織する方法について」（河野健二編，前掲書所収）319—327ページに訳出されている。

15) Louis Blanc, *Organisation du travail*, Paris, 1841.（一橋大学所蔵）

16) Louis Blanc, *Organisation du travail*, 4e éd., Paris, 1845.（名古屋大学所蔵）。なお，第4版については，阪上孝，前掲書，124—132ページにその要約的紹介がおこなわれている。

17) Louis Blanc, *Organisation du travail*, 5e éd., Paris, 1847.（福岡大学所蔵）

18) Louis Blanc, *Organisation du travail*, 9e éd., Paris, 1850.（第9版については慶応大学所蔵のものを利用した）。なお，第9版については，平凡社より出版された『社会思想全集』の第3巻（1932年）に，ロバート・オーエン『社会についての新見解』とならべて訳出掲載されている（ブランの邦訳者は浅野研真氏）。だが，それには，ブラン批判にたいする反論の部分は省略されている。

19) Louis Blanc, *ibid.*, pp.70–71. 邦訳99—100ページ。

20) *Ibid.*, p.121. 邦訳165—166ページ。

21) Richard Passow, *"Kapitalismus" Eine begrifflich-terminologische Studie*, S.2.

22) Louis Blanc, *ibid.*, p.156. 邦訳207—208ページ。

23) *Ibid.*, p.156. 邦訳208ページ。

24) *Ibid.*, p.157. 邦訳209ページ。

25) *Ibid.*, pp.161–162. 邦訳216—217ページ。

26） *Ibid.*, p.164. 邦訳 219—220 ページ。

27） *Ibid.*, pp.157–158. 邦訳 209—211 ページ。

28） 阪上孝，前掲書，99—100 ページ。

29） MEL 研究所編『マルクス年譜』邦訳，青木書店，1960 年，29 ページ。

30） 「エンゲルスからマルクス（在ブリュッセル）への手紙」（1847 年 10 月 25—26 日付け）『マルクス・エンゲルス全集』第 27 巻，90—91 ページ。

31） 同上。

32） エンゲルス「フランスの選挙法改正運動」『全集』第 4 巻，421 ページ。

33） 「エンゲルスからマルクス（在ロンドン）への手紙」『全集』第 27 巻，179 ページ。